

2 0 2 0

わたしが 選んだ この一冊

河合文化教育研究所からの推薦図書



河合塾

アメリカ・インディアン悲史

ふじなが しげる
藤永 茂 著

朝日選書 [定価: 本体1,100円+税]

推薦 小出裕章 (こいで・ひろあき)

1949年生まれ。原子力に夢を抱き、原子核工学を専攻したが、原子力の実態を知るに及び、180度転向。原子力廃絶に半生を賭けた。元京都大学原子炉実験所助教。

著書:『隠される原子力=核の真実』(創史社)、『復刻版・放射能汚染の現実を超えて』(河出書房新社)、『原発のウソ』(扶桑社)、『原発と憲法9条』(遊絲社)、『福島原発事故——原発を今後どうすべきか』(河合文化教育研究所)、『日本のエネルギー、これからどうすればいいの?』(平凡社)、『100年後の人々へ』(集英社)、『原発と戦争を推し進める愚かな国、日本』(毎日新聞出版)、『フクシマ事故と東京オリンピック』(径書房)など。

「コロンブスによる新大陸の発見は何年の出来事か?」と試験に出れば、多くの受験生は「西暦1492年」と容易に答えるであろう。しかし、コロンブスが「発見」した時、そこにはすでに人が住んでいた。コロンブスが到着したのはフロリダ半島沖のパハマ諸島にあるサンサルヴァドル島であった。そこにいたのはアジア系の住民であったため、コロンブスはインドに到着したと考えた。本書のタイトルは「アメリカ・インディアン悲史」であるが、「インディアン」という呼称もそこから生まれた。そこに住んでいた人々はおそらく今から2万年前のウィスコンシン氷河期に、アジア大陸とアメリカ大陸をベーリング陸橋と呼ばれる陸地が繋がっていた時にアジアから移り住んだ人達である。

先住民にとっては「新大陸」でない土地は、ヨーロッパ人から見れば「新大陸」であった。宗教的な迫害を恐れ、メイフラワー号に乗って移住した人々もいた。先住民たちにはもともと土地の私的所有という概念がなかった。彼らは、移住者を温かく迎え、その土地での作物の栽培法、魚の獲り方、肥料の作り方を教えて移住者を支えた。しかし、そんな時代は短かった、ヨーロッパ諸国は「新大陸」を植民地として取り込むことに熱狂し、フランス、イギリス、オランダ、スペインなどが、武力をもって先住民から土地を強奪するようになった。

コロンブスによる「新大陸」発見から500年経った1992年、スペインを中心にして「新大陸発見500周年祭」が開かれようとしたが、一方では、「先住民、黒人、民衆の抵抗の500年キャンペーン」も取り組まれた。北米、中米、南米の先住民たちにとって、この500年は、ヨーロッパ諸国の植民地にされ、命を奪われ、土地を奪われ、文化を破壊された悲惨な時代であった。本書はそのうち、北米の米国を中心に起きた歴史を記している。

現在米国は世界最強の軍隊をもって世界を支配している。地球の裏側にいる人々も自分の気にいらなければ、無人飛行機で殺してしまうこともためらわないし、アフガニスタン、イラクがそうであったように、その国に侵入し、国家そのものを転覆させてしまう国でもある。しかし、日本の多くの人にとっては、「自由と民主主義」の国というイメージが強烈に刷り込まれている。たしかに、米国の独立宣言には「すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」と記されている。しかし同時に「年齢・性別・身分を問わない無差別の破壊を戦いの規則とすることで知られる、情け容赦のない野蛮なインディアン」と記されている。

「新大陸」に侵入し、そこを植民地としようとした白人たちにとっては、そこにもともと住んでいた先住民を虐殺し、土地を奪い取ることが必須であった。その為に考えられた理屈が「Manifest Destiny (明白な天命)」であった。自由と文明と宗教の祝福を受けた白人たちのためには、インディアンたち野蛮人は、土地を明け渡すべきだというのが彼らの論理だった。「情け容赦なく野蛮だった」のは先住民ではなく、侵略者たる白人であった。アメリカ・インディアンと呼ばれた先住民が受けた筆舌に尽くしがたい悲哀を描いたのが本書である。

歴史は強者によって書き残される。虐げられた人々の歴史は往々にして闇に消されてしまうが、その歴史をたどることは、現在の米国の本質を曇りない目で見きだめことになるのだと筆者は書いている。そのことは取りも直さず、アイヌを「土人」と呼び、その土地を奪い取った日本の歴史を見ることにも繋がるし、琉球国を武力によって滅ぼして沖縄県にした日本の歴史を見ることにも繋がる。